

会報前号（第54号）編集後記で、次のように著した。

今、Jane Austen にはまっています。”PRIDE and PREJUDICE”に続き、”SENSE and SENSIBILITY”に取りかかっています（中野康司訳 ちくま文庫）。

前者の冒頭は、夏目漱石がその著『文學論』で絶賛したそうです。
「独りもので、金があるといえば、あとはきっと細君をほしがっているにちがいない、というのが、世間一般のいわば公認真理といってよい。（中野好夫訳 新潮文庫旧訳）」

実際に、漱石の作品の冒頭を、その英文訳とともに見てみる。

【吾輩は猫である】	
吾輩は猫である。名前はまだ無い。 どこで生れたかとうと見当がつかぬ。	I am a cat. But I have no name, yet. I have no idea where I was born at all.
【坊ちゃん】	
親譲の無鉄砲で、小供の時から損ばかりしている。	Because of genetic imprudence, I have been always a loser since my childhood.
【草枕】	
山路を登りながら、こう考えた。 智に働けば角が立つ。 情に棹させば流される。 意地を通せば窮屈だ。 とにかくに人の世は住みにくい。	As I walked up the mountain road, I suddenly noticed. If you follow your wisdom, you will be fallen out with others. If you follow your heart, you will be swept along. If you follow your will, you will be cramped. The world of mankind is an irritated place to live in.

このように、漱石は職業作家として、読者の購買判断が作品の冒頭に係っていることを重く視、重要さを理解し得た作家であった。

しかるに、我らが万葉集の冒頭はどうなっているのか。

籠毛與 籠もよ こもよ	美籠母乳 み籠もち みこもち	布久思毛與 掘串もよ ふくしもよ	美夫君志持 み掘串持ち みぶくしもち	此岳尔 この岳に このをかに	菜採兒 菜摘ます兒 なつますこ
家吉閑 家聞かな いへきかな	名告沙根 名告らさね なのらさね	嘘見津 そらみつ そらみつ	山跡乃國者 大和の国は やまとのくには	押奈戸手 おしなべて おしなべて	吾許曾居 われこそ居れ われこそをれ
師吉名倍手 しきなべて しきなべて	吾己曾座 われこそ座せ われこそませ	我許曾者 われこそは われこそは	告目 告らめ のらめ	家呼毛名雄母 家をも名をも いへをもなをも	万葉集 卷一 1 雄略天皇

『こもよみこもち』から『はやみもこみち』を連想するのは、筆者だけだろうか。

閑話休題。この歌は、初句から、3・4・5・6語と、古墳時代の歌の様式を持っているが、雄略天皇作というのは伝説であろう。天皇の御製と云われるのは権威付けと思

われる。巻二の冒頭歌が仁徳天皇の皇后である磐姫の御製と云われるように。なお、この磐姫の歌はやきもちの極みであるが、本稿では触れない。

さて、この雄略天皇作と伝わる歌は、いわゆるナンパの歌なので、軽く訳しておく。当時は、『名を聞く』イコール『求婚』であった。

ちいーす そこの籠もってるかのじょおー 串もってるかのじょおー なっばつんで
どこ住んでんの？ 名前なんていうの？
ここはね 日本はね 僕ちゃんのなの 僕ちゃんが一番偉いの
僕言っちゃうよ 家も名もね だーかーら あーそーぼ ぽんぽ ぽおーん

本稿は万葉の地学である。この歌には地学の要素がないので、次の歌に移る。舒明天皇による国見の歌である。国見というのは、為政者の重要な国家行事で、今でいう視察にあたる。

山常庭	村山有等	取與呂布	天乃香具山	騰立	國見乎為者
大和には	群山あれど	とりよろふ	天の香具山	登り立ち	国見をすれば
やまとは	むらやまあれど	とりよろふ	あまのかぐやま	のぼりたち	くにみをすれば
國原波	煙立龍	海原波	加萬目立多都	怜※國曾	蜻嶋
国原は	煙立ち立つ	海原は	かまめ立ち立つ	うまし国ぞ	蜻蛉島
くにはらは	けぶりたちたつ	うなはらは	かまめたちたつ	うましくにぞ	あきづしま
八間跡能國者 大和の国は やまとのくには					万葉集 卷一 2 舒明天皇
(※は『りっしんべんに可』で表現不能)					

この歌の問題点は、香久山の上から海面に浮かぶかもめが見えるかという点にある。何？遠いから見えない？いや、距離ではなく、標高の問題である。海が見えたら、そこにはかもめがいて、想像できるから。

奈良から近い海というと、西の大阪湾であるが、西には生駒・金剛山地（標高1,125m）がそびえる。奈良桜井盆地は大和側の流域にあたり、川の流れる北西方向（JR大和路線が通過）を見れば大阪湾が望めるかも、と思っても、その手前は葛城山（標高959m）である。一方、我が香久山は152m。

東・南・北の方角は山また山で、全くの問題外であると思われる。しかし、ここで問題になるのが、琵琶湖である。香久山から琵琶湖は見えるのか。その答えを与えてくれるのが、次の額田王の歌である。



味酒	三輪乃山	青丹吉	奈良能山乃	山際	伊隠萬代
味酒	三輪の山	あをによし	奈良の山の	山の際に	い隠るまで
うまさけ	みわのやま	あをによし	ならのやまの	やまのまに	いかくるまで
道隈	伊積流萬代尔	委曲毛	見管行武雄	數々毛	
道の隈	い積るまでに	つばらにも	見つつかむを	しばしばも	
みちのくま	いつもるまでに	つばらにも	みつつかむを	しばしばも	

見放武八萬雄	情無	雲乃	隠障倍之也	万葉集 卷一 17 額田王
見放けむ山を	情なく	雲の	隠さふべしや	
みさけむやまを	こころなく	くもの	かくさふべしや	

上の歌は、都を近江の国に遷すときに額田王が奈良山で詠んだものである。

奈良山（京都と奈良の境、JR平城山（ならやま）駅がある）を過ぎると三輪山（標高466.9m）は見えなくなる。ましてや、琵琶湖から香久山（標高152m）が見えようか。

この問題は、古来より万葉学者を悩ませてきたと見え、いろいろな解釈が生まれた。

久松潜一	これを鴨と見るかどうかにも説がある。それは、海原を海と見るか湖や池をもさすかということとも関連する。鴨は一般に池などにいる。海原を埴安池（はにやすのいけ）と見れば鴨と解するのがよい。もし遙かに海が見えるとすれば鷗の方がよいが、ここでは実際には海は見えないはずである。
伊藤博	奈良なるヤマトには「海」がない、したがって「かまめ」が舞うのは不思議だとする視野に立つ者には、この古代特有の詩想は理解できないのではあるまいか。天皇は奈良なるヤマトの池どもを「海」と見、そこに舞い立つ白い水鳥を「かまめ」と見たのであろう。そのように思い見たからこそ、「うまし国ぞ」と称揚された末尾の「大和」は、陸と海とによって成る“日本国”全体の映像をになうことになった。
中西進	大和には海はなく、低い香久山に登っても海は見えない。それで、この歌は、かつて存在した埴安池（はにやすのいけ）という考えもあるが、ここも前歌とおなじく、修飾辞をもつ全大和の意識から歌われているので、まさに洋々たる海原を幻視している王者の歌である。
上野誠	海原にたくさんの鳥が集まって、鳥が飛び立っているということは、恐らくそこにはたくさんの魚がいることを表しているのだろう。そして、それは平和を象徴する景色といえるだろう。つまり、実際の景色を歌っているわけではないのである。「豊かな国ですよ」ということが言いたいわけであるから、やはり心の眼で見たと考えるのが、良い解釈であろう。ここで描かれた景色は、理想の国土なのである。

この考えをどう捉えるかは、皆さん一人一人におまかせする。

最後に、次の仮説を紹介する。

天香久山は天上界にある空想上の山で、香久山は地上界の山。舒明帝は地上界の香久山に登ったのだが、そこを天上界の天香久山と見立てて、この歌を詠んだのである。

この説は、何かの本で読んだのだが、探し出せない。したがって、出典不明で誠に申し訳ないのだが、とても魅力的な説と思うので、あえて紹介する。如何。

大和三山、つまり、畝傍山、耳成山、香久山は、奈良桜井盆地に単独に突き出た3つの独立峰である。その生成には、火山である三山の地質学的・岩石学的性質が関係してくる。（単独で3つという点に可笑しいと思う人、それはあなたの気のせいである。）

三山の地質学的・岩石学的性質については、次号で詳しく紹介する。

久松潜一（1976）：万葉秀歌（一），58－64，講談社学術文庫

伊藤博（2005）：萬葉集釋注一，44－52，集英社文庫ヘリテージシリーズ

中西進（2012）：万葉の秀歌，24－25，ちくま学芸文庫

上野誠（2012）：はじめて楽しむ万葉集，27－30，角川ソフィア文庫